

フーシェ 革命暦

I

辻 邦生

工業学院図書館
蔵書章

フーシェ 革命暦

I

辻 邦生

文藝春秋

著者紹介

一九二五年、東京に生れる。一九五二年、東京大学文学部を卒業。一九五七年、パリ大学に留学。一九六一年、帰国。大学で教鞭をとるかたわら、小説の執筆にあたり、一九六三年、『廻廊にて』で近代文学賞を受賞、注目をあびる。一九六六年、書き下ろし長篇『夏の砦』を発表以後、数多くの作品を発表する。前述の作品のほかに『安土往還記』（芸術選奨）『天草の雅歌』『背教者ユリアヌス』（毎日芸術賞）『時の扉』『十二の肖像画による十二の物語』『十二の風景画への十二の旅』など小説作品、また『私の映画手帖』などのエッセイ集の他、多数の著書がある。

フーシエ革命暦 第I部

一九八九年七月二十五日 第一刷
一九八九年八月三十日 第三刷

（定価はカバーに表示してあります）

著 者 辻 邦 生

発 行 者 豊 田 健 次

発 行 所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町三―三
電話代表（〇三）二六五―二二一

印 刷 所 大 日 本 印 刷

製 本 所 大 口 製 本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

斯て我が前に天より聞きし声のまた我に語りて
『なんぢ往きて海と地とに跨り立てる御使の手
にある展きたる巻物を取れ』と言ふを聞けり

序章 海 7

第一章 学院 45

第二章 サロンの鏡 97

第三章 迷路にて 141

第四章 田舎教師 189

第五章 霧の中 241

第六章 海鳴り

295

第七章 荒野の声

361

第八章 河のほとり

405

第九章 蜘蛛の巣の家

469

第十章 雲の動き

535

第十一章 アラスの人々

591

装幀 中島かほる

フーシェ革命暦

第I部

序章 海

いま私の目の前にアドリア海の暗い波が拡がっている。

これを書いている机の上の燭台の火をすかせて、夜明け前の薄闇が海の上にすこしずつ薄れてゆくのがわかる。

窓を閉めているので、冬の荒海の音はかすかにしか聞えない。鷗たちが飛びたつものにもまだ間がある。私はさっきからこの白い紙束を拵げたまま、ながいこと、夜明け前の海を眺めていた。実はここ何日か、私のいつもの習慣にしたがって、日の出前に起きだすと、この海の見える書齋に坐って、海の上に夜が明けてゆくのを見ていたのだ。何冊かの読みたい本があり、読みさしの本もあるのだが、それを横に置いたまま、私は、その夜明けの風景のなかに、差し迫った重要な用件でもあるかのように——熱月テムイットのあの騒ぎの折に私がそうしたように——注意深く、飽きることなく、潮騒に聞き入っていたのである。

私はそこに何かを見ていたのだろうか。このトリエステの寂しい海辺に、流刑同然で送られてきた自分の身の上を慰めるものでも、そこに見つけたというのだろうか。

たしかに慰めという意味では、私は、海を見ていて心が不思議と静まっていった以上、波や風は私にとって単調なものでも無感動なものでもない。だが、すでにここに送られてくる以前から、私は、自分に關する一切について無關心になろうとしている。自分がよくならうと悪くならうと、そのことは、今の私には、もう大して意味を持たないのだ。その点から見ると、海が私に慰めをもたらしているとは考えられない。ただ海がそうして何日も私の注意を惹きつけ、私がそれに飽きることがなかったというのは事実である。

ときどき私は自分が海と一つになり、私が夜明け前の空の下で波となりうねりとなって動きつづけているような気持ちになる。私はながいこと自分が海から生れ海に育ったというのを忘れていた。私がこんなにも海に魅入られているのは、そうした本来の自分に、波乱の年月のあと、再会しているためだろうか。

たしかにそんな趣はあるかもしれない。私は空が明るみ、果しなくうねる波が見えはじめると、それがアドリア海などではなく、あの荒々しい大西洋であると、思いこんでいるからだ。もちろん私は自分にそんなばかなことはない、これは大西洋なんかでなく、アドリア海だと言っても、身体のだこかには、依然として、それを大西洋に見たてたがっている自分が隠れているのだ。

おそらくこれが数年前だったら、こんな状態を自分に許

することはなかったらう。つねに考え、つねに動き、つねに働きかけること——それが私の生活信条であつたからだ。私はそれでこの六十年の激しい生涯を生きぬいてきた。ふ

つうの人々なら混乱し、意氣沮喪し、不安と恐慌に陥るようなときも、私は、ただ、生命の原理は動くことだという単純な原則にしたがって生きつづけ、自分にそうした疑心暗鬼すら許さなかつた。私は窮境を打開すること、不運を幸運に変えること、絶望を乗りきることをまず自分の生き方の根本原理にしていた。人々は私を変節漢とののしり、日和見主義者と嘲り、出世主義者とわめき立てる。お前は良心がないのか、自意識がないのか、反省力がないのか、と、齒がみしながら、私に向つて譴責の言葉を投げつける。

私はそれに対して、いまは何一つ答えたいとは思わない。何年か前に、私はかなり長い回想録を一度書いてみたが、そこでは、私自身に対する弁護もかなり意図されていたのだ。そのことを私は否認しようとは思わない。自分を主張すること、自分の意図をはっきり表明することは人間として義務でさえある。それが戦いの様相をとるとしても、そうしないではいられないより、そうした方が、人間にとって正しいのだ。

だが、それにもかかわらず私はもはやそんな気持ちさへなくなつた。私は、自分に関するすべてのことが——自分の周囲に起つたこととともに——ありのままに見えているよ

うな気がするのだ。そこには善悪もなく悔恨もない。運不運の思いもない。まるで私という人間が、ただそうした世の出来事を見、味わうために、送りだされ、そこにまぎれこみ、そこからまた送り返されてきた、というような感じがするのである。

私はこうして何日か海を眺め、自分が海と一つになっているのを感じるようなとき、自分とは何だったのか、自分が見聞きしたこの世とは何だったのか、を、もう一度——こんどは自己弁明などという気持を含まず、ただ自分のためにだけ——問いなおしてみたい気持を覚えたのだ。前の回想録のときは、まだ一仕事も二仕事もする気があつた。だが、いまは、周囲の状況からそれが望めないというより、私自身がもはやそういう世俗の形で動くという気持を失つてゐるのだ。無限に生は活動するという私の原則は、かつてのように外に向けられるより、内に向けられてゐる、と言つていいかもしれない。だが、それは、こうした自分への問いを徹底的に推しすすめ、そこから真の自分を見きわめるには、またとない好機ではないか——私はそう思つたのである。

はつきり言つて、私に残されたただ一つの望みは、私を含めてこの人間という存在は何なのか、を自分なりにはっきり掴んでみることなのだ。私には、もう私をオトランド公爵として取扱つた社会にも歴史にも未練はない。私はも

はやジョゼフ・フーシェという一人物でさえない。私はそこから生れそこへ還ってゆくであろうこの海と、いま一つになっている無名の何ものかなのだ。

私が煖炉の火を焚かせ、机の上の燭台のもとにこの白い紙束を拡げたのも、そこに何かを書き、何者かへ私の内奥を伝えようと思ったからではない。そうではなくて、海を見つめてただ思いにふけていては、何一つ確実な形で、自分にせよ、自分の周囲にせよ、思い出すことができないことがわかったからなのだ。事実、私は何日かそうしてぼんやり海を見ながら夢想していたのであるが、あるときはマクシミリアンの蒼い顔が、いつかジョゼフ・ル・ボンの顔にまじり、ミュリエルの姿が知らぬ間にジョゼフィーヌに変っていたりして、なるほど心の赴くままにさまざまな映像が溢れ出て、それはそれで、まるでルイ十八世の大舞踏会さながらで、愉しくないわけではないが、しかしそれだけでは、物をじっと見きわめてゆくという、集中した視線が不可能になってゆくのである。

私のなかには、この溢れるような映像の群が蠢いている。六十年の大激変の時代を、私はいわばその渦中の人として過してきたのだ。行きずりの人物まで含めたら、何千、何万の人々が私のそばを通過していったのである。マクシミリアンにせよ、アントワヌ・ド・ナルボンヌにせよ、ボナパルトにせよ、タレイランにせよ、いづれ劣らぬ人物で

あったが、こうした一すじ縄でゆかぬ連中が、いつてみれば、群となり、潮となつて、私の生涯に交錯しているのだ。それをただ思い起すだけでは、一つは他の一つに重なり、前のことは後のこととまじり合つて、それこそ私の眼の前に激浪の渦となつて奔騰しはじめるのである。

私が白い紙の束と驚ベンを用意したのは、ただこうした映像の渦にはつきりした輪廓を与え、それが本来保っている秩序ある姿へ、それらを戻してやるためである。

言葉というのは、何というめでたき、すばらしき能力を備えているものか。あれほど堰を切つたように溢れ出てきた映像の奔流は、この言葉の持つ秩序に制御され、あるべき形と、あるべき時間の前後のなかに、引き戻されることになつたのだ。私にとつていま必要なことは、一見力があるように見えるこの映像の奔出ではなく、その一つ一つを見きわめるという仕事なのだ。かつてよく行動した私は、いま、よく見る人として、内面的に働こうというわけである。

それにしてもこの海の果しない動きは何を示しているのか。私はここから生れたというのは比喩ではない。私の家は代々大西洋を舞台にした船乗りであつたし、私のなかには、海とともにある人間の、細心さと向う見ずとが同居している。海の持つ無限な繰り返しとその拡がり、私たちが海に生きてきた人間に、自由と夢想と果斷と畏怖を教えて

きたのだ。だが、同時に、私たちがいつかこの海に還ってゆくという、諦念と畏れに満ちた、きびしい思いを抱かせないではいかなかったのである。

私はずっと昔から自分が海に還るであろうことを知っていた。この塩辛い水という物質に、自分が分解し、融け、一つになることをひそかに覚悟していたのだ。

私の生涯のすべてはそこから始まるように思う。熱月のあの危機一髪の瞬間にも、霧月の湧きたつ激動のさなかにも、私は、この人間たちはいずれ海に還るのだという不思議な思いに貫かれていた。そのため、私は、激昂することもなければ、恐怖に追いつめられることもなかった。

私は、ただよく眺め、よく判断し、よく動くことができた。それは、烈風のなかで、波の動きを見つめ、舳先をどう起し、帆をどう廻すかをよく知った船乗りたちと同じであった。船乗りたちは海を畏れ、海に還ることを諦念をもって知るゆえに、帆綱に唸る風にも舳先に白く碎ける波にも、恐怖の思いを呼び起されることはないのだ。正しい帆の動きさえ知れば、波は決して船を呑みこむことはない。もし海がボセイドンの怒りさながらに帆柱を打ち倒すことがあれば、人々は、海に戻ることを決意しつつ、船板に身体を縛りつけて、こう叫ぶ。「さあ、海よ、神々の思いのままに、私たちを運び去れ」と。

思えば、それが私の一生ではなかったか。山嶽党の連中

が断罪をためらっていたとき、リヨンの硬い石だたみを鳴らしてバリから召喚の命令を持った馬車が近づいてきたとき、またエルバから寝耳に水とボナバルトが脱出したとき、私は、船乗りたちと同じく、自分の運命を船板に縛りつけて、怒濤のなかに身を投げたのではなかったか。

過ぎてみれば、すべて成るように成ったとしか言いようがないが、それでも私は、あのさなかに、どこか、いまと同じ静寂が心に残っていたような気がしてならぬ。私は船乗りの知恵と諦念をすでにして身につけていたと言ってもよいのかもしれない。

だが、こうした思いをいくら書きつづけたところで、ここに、私の目ざす私自身の姿が浮び上ってくるわけではない。ただ、こうした驚ベンを軋らせながら、せつせと文字を連ねてゆく仕事、私自身のためのものであり、いまいった目的のためにあるのだということ——したがって私は自分との対話のためには当面の主題からそれることもあろうし、思わぬ思い出の細部のなかに、ペルシャの唐草模様さながらにまぎれこむこともあるが、まさしくそうした逸脱、細部への偏執、忘れた事柄の呼び起しこそが、書くことの本質であるのだ。私は幼少時なり、オラトリオ教団の修道院学校での生活なりの細々とした物語を、自分にむかって、いつ尽きるとなく書きつづけてゆきたい。それは私にとって千夜一夜の物語であっていいわけだし、そうし

た物語の繁みのなかに身をひそめてこそ、私が書類の山のなかに暮し、無数の指令を口述し、会議と執務のあいだで日々を送っているうちに、時間の彼方に見失っていたものを、ふたたび自分の眼の下に呼び戻し蘇生させることができるのである。

すでにいかなる読者も想定しない、この内奥の、一人の自分自身との対話を、どうして読み易い、波乱に富んだ飾りと見てくれに満ちた回想にする必要があるだろう。

おそらくこの回想録は、いままで書かれたこの種のものでは、もっとも赤裸で、真実の姿を描きだそうと配慮してあるばかりではなく、頭から出来栄えを顧慮しない、荒けずりな、印象につぐ印象のみでつなげられた、著述になるであろう。この回想を書き終えたとき私が信じたとき（むろんこのトリエステの湿った氣候と陰気な風土からは到底私の健康がそれを許すとは思えないし、また、この種の迂回と足踏みと彷徨を目的とする著述に終りがくるとは考えられないが、それでもなおかつ、私が自分と自分の時代のすべてを書き尽すことができたと思じたとき）そのとき、私は、これを娘に言つて、このP*男爵家の城館の煖炉に投げこんで灰にするように命じたいと思う。おそらく封印されたこの紙束は、その指示をつけて娘の手に残されるであらう。灰になるかならぬか、そのあとのことはただ神々の意志に委ねられる。私はあくまで船乗りの流儀にこのイ

ンクの染みた紙束の運命を託すことにしよう。そう思うだけで私の気持も安まるし、驚ペンのぎしぎしいう音も、疲れたとき以外は止まることはないだろう。なぜなら、ただ気のむくままに書かれ、輪廓を回想のなかにあらわにするためだけ言葉によつて描き出されるのであれば、言葉そのものの結構について、たとえばバンジャマンが言うような具合に考える必要がないからだ。私はただ書きに書くだけであるし、この龐大な量と思われる回想のなかの人々の言動、姿、浮き沈み、また出来事の次々の変りようは、そうでもしなければ、その百分の一も描きつくことはできないであらう。

万一娘がこの龐大な紙束を煖炉に投げこまず、これが他人の眼にとまることがあつたらどうであらうか。人々は一老人のわけのわからぬ繰り言に顔をつき合はすことになるか、それとも、私という一個の人間が何者であつたかを、私自身がわかつていったように理解してゆくことになるか、私にはまったくわからぬことであるし、それは私の責任を越えた事柄だ。少くとも、これを書く私には、そんなことはどうでもいいのだ。ここに書かれたある龐大な量を持つところのものは、海のあの龐大な動きと同じく、何ものも意味しない。それはそのようにあるだけだ。そのように私にとつてあつたし、またありつづけるのだ。海が虚無に似ているという意味では、私が自分のために書くこの文字の

羅列は、虚無に似ている。だが、私にとって、目下、この虚無なるものほど実在感を持つものはないのだ。ここには修辞もなく、論理もない。物語を面白くしようという意図もない。ただかげろうのようにゆらめく影をはっきり定着し、一つの形として、生きた動く姿として、そこに掴みなおそうとする目的があるだけだ。

だから私はいま私自身の気持にただ寄りそって、心のゆくまま、思いの走るままに書けばいいのだ。何か次々と生まれ、形をとり、私のなかの薄ぼけた地下墓室から、言葉の明るみのなかに出てくること——それ以外の何を私が望み得よう。

驚ベンを走らせているうち、眼をあげると、窓の外は、もうすっかり白んで、透明な雲が、沖にたまった暗い紫を帯びた雲塊の上に点々と浮んでいる。すでに鷗が群れて沖に飛びはじめている。今朝の海は波は穏やかだ。海面はまだ半陰影のなかに暗く眠っているが、空はすでに明るみ渡って日の出が間近のいを告げている。

書斎の窓から見ると、窓の先の木立に囲まれた霜枯れの庭を越えて、砂浜が拡がっている。黒い岩の群がかたまり合って、城館の先につづいているので、窓から、その岩に打ち寄せる波が、白く碎けるのがよく見える。

左手に岬がのび、右手は風景の奥へアクイレイアの扁平な陸がつづいている。この水平線のむこうはヴェネツィア

であるはずだが、ただ見ているぶんには、果しない水の連なりである。かつて父の町ル・ペルランから馬車でローワルの広大な河口を下って、サン・ブルヴァンの叔父の家に初めて泊ったとき、私が見た大西洋の息を呑むような広さと、それはいささかも違っていいない。黒ずんだ岩の群に碎ける波も、岩のたたずまいも、右手にのびてゆく平地の拡がりも、ローワルの河口に近いサン・ブルヴァンを思わせる。違っているのは、この陰気なトリエステの海辺に立つのがすでに六十歳になるオトラント公爵であり、大西洋の風を身に受けているのが四歳になったばかりの、瘡せて蒼白い顔をした、無口なジョゼフであるということくらいだ。

老人と子供——外見は異なるが、果してそこに変ったものが認められるのか。子供のなかには、すでに、一生の宿命がそのまま畳みこまれた形で蹲うすくまっているのだ。それはすでにあったが、まだ外に形をとって現われていなかったただけだ。なぜなら、この少年ジョゼフは頑健な日焼けした父ジョゼフのように船乗りとして海に向うようにつくられていなかったからだ。母のフランソワーズが頭からすっぽり厚いシヨールをかぶって、奥深い、心配そうな眼で私を見ていたとき、いったい私が甲板の上で星を測り、羅針盤をのぞきこんで、重い船荷に吃水線を波に深く沈めた船をローワル河の河口にむかって進めてゆくなどということを考えたであろうか。おそらく母は、おびえた、信心深い、灰

色の眼を私の上にそそぎながら、私が父親とは別の生涯を送るであろうことを知っていたに違いない。

私はいまもよく憶えているが、その頃のある夜明けに、叔父の家を起き出して浜へ下りていったことがある。それまで私がサン・ブルヴァンに連れてゆかれたのかどうか知らないが、その朝まで、私はこうした広々とした海というものを見たことがなかった。水といえば、ル・ペルランの港から見る広いロワールの河口をひたす水だけであった。子供の眼にはそれでさえ広々と果しく思われたものだったが、サン・ブルヴァンの海の印象はとてむとそれと比較できるものではなかった。

私は水が風に打たれ、波頭をあげ、海辺にどうどう打ち寄せてくるものであることを知らなかった。平坦で、滑らかな、水流の速いロワール河とそれは何という違いだったろう。ル・ペルランの岸辺にも、アメリカから戻ってきた船がゆっくり河口をさかのぼってゆくとき、ひたひたと波にが、そんな河波とはまったくとない、ひたむきな動きが、私がそこに何を感じたのか知り、海が明けてゆくのを眺め、透明感を加え、やがて太陽が輝き出たとき（私の明海辺に冬の朝の太陽が射し、

けるのに見とれた。風は沖から岸辺に向って、激しく吹き、明るくなった長い海岸線に、崩れ落ちる波が白く泡立ちながら、まるで追い駆けごっこをするように、波打際を薙いでのぼっていた。私は生れて初めて何か言い知れぬ歓喜の念を覚えた。風は耳もとでどうどう鳴り、足もとの岩から飛沫が身を濡らしたが、そんなことは、こわくも何ともなかった。私は自分の病気がちな身体のことも考えず、自分が父のあとをいで船乗りになることを幸福に思った。

ル・ペルランの港に出るたびに、船頭や使用人や婆やのローズが私に船を指さして、あの船は父ジョゼフがベル・イールにゆく船だと説明したし、黒人と混血のローズ婆やが、彼女の父がずっと南の国からきたことを私に話し、霧の深いブルターニュの岸辺で何度難破しかかったかわからないと物語るようなとき、私は、半ば口をあげ、ただそうした物語のなかに、父祖の血の騒ぐのを聞くように思い、静かに波止場に浮ぶ船を、この世ならぬ驚異の魔法でもあるかのように子供らしい満足を感じながら眺めたのである。

私がその朝のことをいまなお忘れられないのは、その直後、次のようなことが起ったからである。

サン・ブルヴァンの叔父の家に、ナントの雑誌を取扱っているエドゥアールと呼ぶ男が暮していた。エドゥアールは父たち兄弟の末弟だったが、見習水夫の頃、マストから